

再読!!

5つの物語

美術が語る夢と現実



2020年

9月5日(土) - 12月6日(日)

会場 世田谷美術館 1階展示室

開館時間 午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで)

休館日 毎週月曜日(ただし、祝・休日と重なった場合は開館、翌平日休館)

※9月21日(月祝)、11月23日(月祝)は開館、9月23日(水)、11月24日(火)は休館

観覧料 一般2000(↑600)円、大高生1500(↑200)円、65歳以上/小学生1000(80)円

※()内は、20名以上の団体料金。*障害者の方は1000円。ただし、小・中・高・大学生の障害者は無料。介助者当該障害者1名につき1名は無料。*小・中学生は土、日、祝・休日は無料。*同時開催のミュージアムコレクションⅡその1「吹田文明と版画集『東京百景』展も」覧いただけます。

世田谷美術館
Setagaya Art Museum

〒157-0075 東京都世田谷区砧公園1-2
Tel. 03-3415-6011(代表)
<https://www.setagayaartmuseum.or.jp/>
展覧会G11 案内: 050-5541-8600 (ロータリーナビ)

再読!!

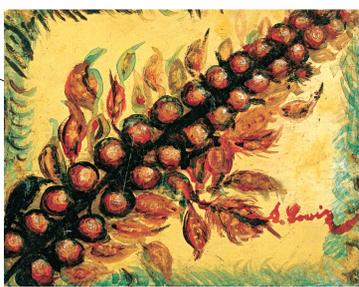
5つの物語

美術が語る夢と現実

2016年の「コレクション」の5つの物語」展は、美術と生活をめぐる物語をテーマに、フランス素朴派の画家たちをはじめ、さまざまな作品を紹介しました。

プロローグ
5つの物語の入り口として、素朴派の絵画にも関心を持っていたマックス・エルンストの《ヤヌス》を展示します。

第1話
「私をめぐる物語」
自分の描きたいものを自分の思いのままに描いていた素朴派の画家たち。私だけの物語が、時代や地域を超えて人々の心をとらえ続けています。



01 セラフィーヌ・ルイ 《枝》1930年 油彩、板



02 土久功 《マスク》1929年 木

第2話
「未知の文化と出会う物語」
1929年に単身で南洋に向かい、パラオそして絶海の孤島のサタワル島で、合わせて10年以上を暮らした土久功が、現地で制作した彫刻を紹介し、また、西アフリカの床屋の看板も展示します。

本展覧会は、その内容を再構成したものです。社会の基盤が大きく揺れ動いている今、作品の見え方や物語の印象も根底的に変化します。もしかしたら、作品の発するメッセージが、より鮮明に響いてくるのかもしれない。ぜひ、再読をお楽しみください。

第3話
「美術と言葉で物語る」
河東碧梧桐の書に水木伸一が絵を添えた合作、柚木沙弥郎による人形、さらにオディロン・ルドンと駒井哲郎の版画から、美術と文学の関係について想いを巡らせます。



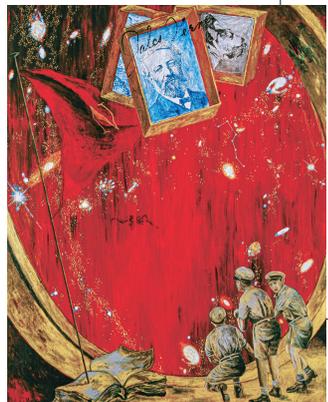
03 画：水木伸一、書：河東碧梧桐 《碧水帖 上州ぬる湯の記》1932年 水彩、墨、紙

挿話「暮らしの姿」
ここでは挿話として、桑原甲子雄が撮影した、人々が行き交う東京の姿を見ていきます。



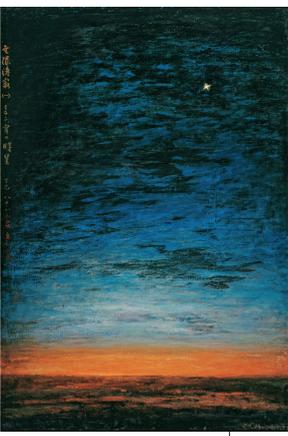
04 桑原甲子雄 《マスク》(世田谷ホロロ市より) 1936年 セラチンシルバープリント

第5話
「日常から始まる物語」
横尾忠則は子どもの頃に親しんだ物語の挿絵を作品に取り込んでいます。現代の作品もまた、人々の普段の生活と深く結びついていることを教えてくれるようです。



06 横尾忠則 《ジュール・ヴェルヌの海》2006年 アクリル、油彩、コラーージュ、キャンバス © TADANORI YOKOO

第4話
「大きな物語のなかの私」
私をとりまく世界、そして私の内なる世界は、どれほどの大きさをもっているのでしょうか。小さきものに目を向け描き続けた熊谷守一のカットと、砂漠の星空に魅了された小堀四郎の作品を対比します。



05 小堀四郎 《無限静寂(宵の明星一信)》1977年 油彩、キャンバス

03、06 撮影：上野則宏

エピローグ
物語の終わりとして、路上で暮らしながら絵を描き続けたアメリカの黒人画家、ビル・トレイラーの作品をご紹介します。

